

開三頭一

—一切衆生皆成仏道の教え—

開三頭一とは

開三頭一とは、読んで字の如く「三を開いて一を顕わす」ことであり、法華以前の声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えを開き、一仏乗の真実の教えを顕わし出すことを言います。

釈尊はインドに出現し、三十歳に菩提樹下で悟りを開いてより、華嚴・阿含・方等・般若等の教えを四十二年にわたり説かれ、最後の八カ年に法華涅槃の教えを説かれましたが、最後の説法である法華経を説くに当たって、法華部の開経である無量義経に、「種種に法を説くこと、方便力を以てす。四十余年には未だ真実を顕さず」（法華経 二三〇）

と説かれ、さらに法華経『方便品』には、

「世尊は法久しうして後 要ず当に真実を説きたもうべし」（同 九三〇）

「唯一乗の法のみ有り 二無く亦三無し」（同 二〇〇）

等と仰せられて、法華以前の四十余年の爾前経における三乗の教えは方便の仮の教えであり、これから説く法華経の一仏乗の教えこそが真実の教えであると宣示されています。

釈尊の本懐

なぜ法華経が真実の教えであるかと言いますと、法華経に初めて一切衆生の成仏の道が示されたからなのです。釈尊は『方便品』の中に自身の出世の本懐について、

「我本誓願を立てて 一切の衆をして 我が如く等しくして 異なること無からしめんと欲しき 我が昔の所願の如き 今者已に満足しぬ」（同 一一一）

と示されました。つまり釈尊は昔より一切衆生の成仏を願われてきましたが、現在この法華経を説くことによって、二乗をはじめとする一切衆生がおしなべて成仏できるのだから、自分の所願は既に満足したのだと仰せになったのです。

そして、その願いは三世十方の諸仏の共通の願いでもあったのです。『方便品』には、

「諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したもう」（同 一〇一）

と説かれています。つまり三世十方の諸仏はただ一つの重大な因縁・目的をもって、この世に出現したのであり、その唯一の重大な因縁・目的とは、一切衆生が持っている仏の知見（智慧）を開き示し悟らせ、その道に入らしめるため、つまり一切衆生を皆、真

の成仏に導くためだったと説かれたのです。これを四仏知見（開・示・悟・入）と言います。

四一開会

この四仏知見は、仏の智慧の一切を挙げて法華經に歸一させたのであり、一仏乗の法華經以外には別に仏の智慧はないことを明示されていますから、これを「理一開会」と言います。つまりすべてのものを一つの妙法の円理の中に開会したのです。なお開会とは、開顯会融・開顯会歸の略称のことで、方便の教えを開くことによって真実の教えを顕わすと共に、方便の教えを真実の教えの中に融合し會入し歸一することを言います。

次に釈尊は、

「諸佛如来は但菩薩を教化したもう」（同 一〇二）

と説き、「人一開会」を示されました。これは、四十余年の方便の諸經においては、声聞・縁覺・菩薩というように人々を差別的に区別して教化しましたが、法華經においてはこのような差別を取り払って、一切衆生すべてを皆平等に法華円教の菩薩、つまり眞の仏の子として一仏乗の教えに歸一させたのです。

さらに釈尊は、

「諸の所作有るは常に一事の爲なり。唯佛の知見を以て、衆生に示悟したまわんとなり」（同）

と「行一開会」を示されました。これは、佛知見を体得する直道には一仏乗の修行のみがあって、三乗等の方便の諸行がないことを言います。

次に釈尊は、

「如来は但一佛乗を以ての故に、衆生の爲に法を説きたもう。余乗の若しは二、若しは三有ること無し」（同 一〇三）

と説いて「教一開会」を示しました。これは、佛の教えは声聞・縁覺の二乗やこれに菩薩を加えた三乗等の教えでは本来なく、ただ一乗の妙法であることを示し、諸乗を法華經に開会したことを言うのです。

このように理・人・行・教にわたって一乗に開会したことを「四一開会」というのです。

施開廢の三義

中国の天台大師は、この開会を説明するために施開廢の三義を立てました。この施開廢の三義とは、爲実施權・開權顯實・廢權立實のことを言います。

爲実施權とは實のために權を施すことで、實教である法華經を説くために、四十二年間權教の爾前諸經を説いて衆生の機根を調えられたのであり、あくまでも權教は實教のための方便であることを言います。

次に開権顕実とは、権の教えを開いて真実の教えを顕わすことであり、廢権立実とは権を廢して実を立てるのであり、実教を説き明かした以上、もはや権教は廢亡してなくなり、実教のほかに立てる法がないことを言います。

法華經と権の教えである爾前經との関係は、施開廢の三義をもって説明できます。また、すべての権の教えが真実の法華經に収まっていく姿は、あたかも幾多の河川が一つの大海に収まることに譬えられます。

日蓮大聖人は『上野殿母尼御前御返事』に、

「たとへば大塔をくみ候には先づ材木より外に足代と申して多くの小木を集め、一丈二丈計りゆひあげ候なり。かくゆひあげて、材木を以て大塔をくみあげ候ひつれば、返って足代を切り捨て大塔は候なり。足代と申すは一切經なり、大塔と申すは法華經なり。仏一切經を説き給ひし事は法華經を説かせ給はんための足代なり。(中略) 大塔をくまんがためには足代大切なれども、大塔をくみあげぬれば足代を切り落とすなり。正しょう直捨方便と申す文の心是なり。足代より塔は出来して候へども、塔を捨て、押足代ををがむ人なし」(御書 一五〇九)

と、大塔と足代の譬えをもって、法華經と一切經の関係について説明されています。



開三顯一は、法華經 迹門の教説の中心で、爾前經に絶えて説かれなかった釈尊の隨自意の説法であり、その説相には略開三顯一と広開三顯一があります。

略開三顯一は、まさにただ仏と仏のみしか判らないもので、それは『方便品』の十如実相によって顕わされた理の一念三千の法門です。

この法理は、続く広開三顯一の三周の説法(法説周・譬説周・因縁説周)によって明かされ、永不成仏とされた二乗の作仏へと実際に繋がるのです。その初めの法説の中で説かれたのが、五仏同道における四仏知見であり、四一開会です。

これにより上根の舍利弗が未来成仏の記別を受け、その後、譬説・因縁説によって中・下根の二乗の成仏が説き明かされるのです。

しかしながら、この開三顯一・理の一念三千の法門もまだ迹門の分域であり、本門の事の一念三千の法門からすれば一重劣っています。大聖人は『開目抄』に、

「迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失一つを脱れたり。しかりといえどもいまだ發迹 顯本せざれば、まことの一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず」(同 五三六)

と仰せられているように、本門の教えが説かれて初めて一切衆生成仏の原理である一念三千の法門も確立するのであり、開三顯一の法門も生かされてくるのです。